

11	海部	蟹江町立舟入小学校	クボタ ミノル 名 前 窪 田 稔
分科会番号	1	分科会名	国語科教育（作文その他）

研究題目 見通しをもって、粘り強く取り組む力が身に付く書写の授業づくり

研究要項

1 主題設定の理由

本校では、書写の学習指導に重きをおき、令和4年度から「学びが日常に広がる書写指導を目指して」を主題として、日本の文字文化のよさを理解し、書写の学習に主体的に取り組んできた。そして、書写の学習で学んだことをさまざまな生活の場面で生かそうとする児童の育成を目指して次の二点を柱に三年間研究に取り組んだ。一つ目は「書写の学習を書写以外の学習や学校行事などの教育活動と関連させた授業実践を行う」こと、二つ目は「筆記具の正しい持ち方や、文字を書くときのよい姿勢を身に付けるための学習方法や指導方法を工夫する」ことである。以上の実践を積み重ねた結果、「書写の学習は、他の学習の役に立つと思いますか」という質問に対して、「思う」または「どちらかといえば思う」と答えた児童の割合が、実践前の88%に対して、実践開始以降は常に95%以上となり、また、「鉛筆を正しく持って字を書いたり、正しい姿勢で字を書いたりしている」と回答する児童の割合も研究が進むにつれて上昇した。さらに、児童が手書きのよさに気付き、読み手をより意識して手書きの掲示物や観察記録などの作成に取り組むようになるなど、「学びが日常に広がる書写指導を目指して」という主題に対して、一定の研究成果を上げることができた。

一方で、研究開始前と比較して、日常の書字能力の向上が見られなかった児童も一定数いる。そこで、児童の書字能力をより向上させるための授業改善を中心とした研究に取り組むこととし、新たに主題を「見通しをもって、粘り強く取り組む力が身に付く書写の授業づくり」とした。

本研究では、「文字や文字の集まりの整った書き方を理解し、進んで身に付けようとする児童」を目指す児童像として、実践した授業における児童の活動の様子や変容、書字の記録から、研究仮説を検証していく。さらに、本研究を通して、児童の発達段階や指導内容の系統性などを踏まえつつ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、児童が見通しをもって学ぶことができる学習過程の構成を目指し、教師の授業改善・指導力向上を図っていききたい。

2 研究のねらい

(1) 目指す児童像

文字や文字の集まりの整った書き方を理解し、進んで身に付けようとする児童

(2) 研究仮説

教師が書写学習の系統性を理解し、教材に応じて単元構成を工夫したり、よりよい提示資料の開発に努めたりしながら授業実践を積み重ねることにより、児童は文字や文字の集まりの整った書き方についての理解を深め、それらの習得に向けた活動に主体的に取り組むようになるであろう。

3 研究の方法

(1) 研究年度

令和7年度～令和8年度（二年間）

(2) 研究の対象

全校児童

(3) 研究の手立て

手立て① 習得・活用・探究のバランスを考えて単元構成を工夫し、授業実践を行う。

手立て② 各学年相互の関連を図り、参考図書を活用して系統的、発展的な指導を行う。

4 研究の実際と考察

(1) 手立て① 習得・活用・探究のバランスを考えて単元構成を工夫した授業実践

① 「漢字の筆使い「おれ」」(3年生・令和7年7月実施)

目標：毛筆を使用して、折れの書き方への理解を深めて書くことができる。

〈学習活動計画〉

時間	まとめり	学 習 活 動
1	習得	穂先がどこを通るのかを考えながら折れを書く。
2	探究	折れの筆使い(運筆)に気を付けて、毛筆で「日」を書く。
3	活用	毛筆で学習したことを生かして、硬筆で折れをもつ漢字を書く。

習得

この単元では、基礎的な運筆の「習得」から入り、その後「探究」へつなげていく順序で学習を行った。まず、既習事項の想起後、折れの運筆動画を視聴させ、横画・縦画で穂先の向きが同じであることを確認させた。また、画が折れる所で一度筆を止め、角張るようにして方向を変えることも確認させた。しかし、一度筆を止めた後に、筆を右に回し、縦画の部分で穂先が中央を通ってしまう児童が複数名いた。教師が教材文字を書いているところを見せたり、児童の筆に手を添えたりして習得を支援した。

探究

折れの筆使いに気を付けて、毛筆で「日」を書かせた。児童自らが課題を決めて練習し、途中で相互にアドバイスをを行うことで、折れの部分で一度筆を止めることを意識して練習を行うことができ、縦画の穂先も常に左向きのまま書くことができるようになった【写真①】。



【写真① アドバイスをする様子】

活用

毛筆で学習したことを生かして、硬筆で折れをもつ漢字を書く学習を行った。毛筆の学習を想起し、硬筆でも折れるところで一度鉛筆を止めてから縦画を書くことができていた。

② 「平がなの筆使い」(4年生・令和7年9月実施)

目標：折れの筆使いの仕方を考え、毛筆で平仮名「ん」を書くことができる。

〈学習活動計画〉

時間	まとめり	学 習 活 動
1	探究	折れの筆使いの仕方を考え、毛筆で平仮名「ん」を書く。
2	習得	「らん」の折れの書き方を確かめ、筆使いに気を付けて毛筆で書く。
3	活用	毛筆の学習を生かして、硬筆で「らん」「みね」などの折れを含む平仮名を書く。

探究

毎時、掲示した単元計画で本時の位置付けを示し、児童に見通しをもたせた【資料①】。また、前年度との関連を意識させるために、「日」で折れを、「つり」で画の丸みについて学習したことを振り返らせた。折れでは、筆を一度止めること、「つり」では、画の丸みの運筆に気を付けることが挙げた。また、二つの平仮名「ん」を見比べ、折れに着目して、どちらが整って見えるか考えさせた。折れに注目すると④の方が整って見える。その根拠として「折れ」の部分がぼんやりしていたり、丸まっていたりすると、字が整って見えないことに気付かせた【資料②】。このことから、折れでは、一度筆を止めるという既習事項をもとに、平仮名でも一度筆を止める大切さをポイントとしてまとめた。この後、水書用紙に「ん」の練習をし、まとめ書きとして、水習字用紙に書いた。水習字用紙は、止めた所が濃くなるため、画の途中で筆を止めているかが明確に分かった【資料③】。

習得

運筆動画と前時の書字を振り返り、折れで筆を止めるというポイントを意識して練習させた。数枚練習した後は、グループでアドバイスをし合う時間を設けた。よい所と、さらに気を付けるとよい所の二つを各自発言させた。それをもとに、教材文字に印を書いて、自分の課題を明確にして、練習を進めさせた。相互にアドバイスをする時間をもつことで、客観的に自分の書いた文字と教材文字を比較することができ、点画や字形の特質を捉える力が育っていると感じた。また、自分の書字のよさが分かることで自信をもつことができ、書字の練習意欲を高めることにつながった。

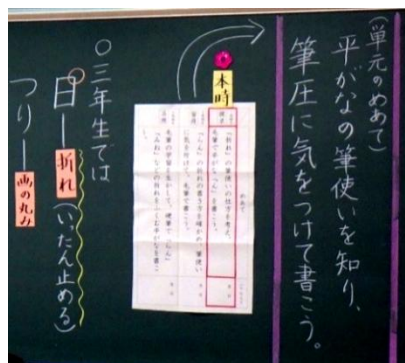
活用

平仮名の練習では、意識をしていないと運筆の速度が上がってしまい、毛筆で学習した折れ

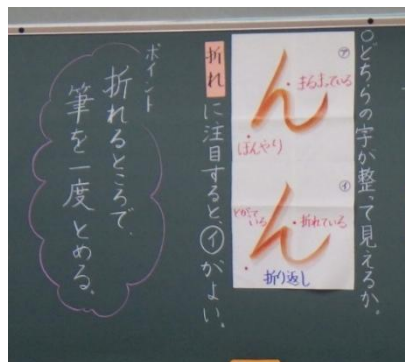
で一度止める動作が不十分になってしまう。そこで、一文字ずつ確認しながら書かせた。折れのところでは、心の中で「止め」とつぶやきながら書かせるようにした。折れの定着後は、始筆の位置や字形にも気を配って書字するよう指導した。

(2) 手立て② 学年相互の関連を図り、参考図書を活用した系統的、発展的な学習指導

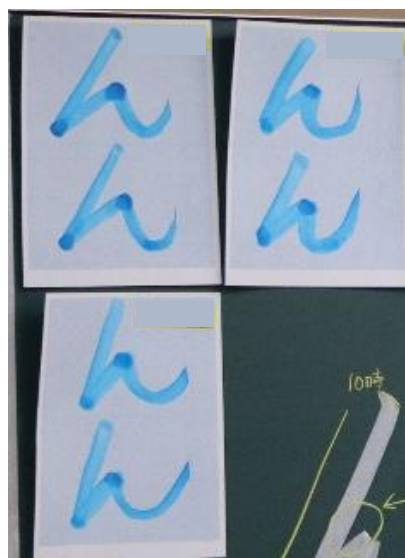
5年生の「点画のつながりと字形」の単元では、穂先の動きを次の画へつなげる意識で書くことにより、運筆がスムーズになり字形が整うことを学習する。さらに、6年生では、関連する単元として「点画のつながりと読みやすさ」を学習する。高学年で求められる「書く速さ」や「読みやすさ」の習得に向けた系統的指導を目指し、これらの単元の関連を意識させながら学習を進めた。



【資料①】 単元計画の掲示



【資料②】 「ん」の比較掲示



【資料③】 水習字用紙に書字した様子

① 「点画のつながりと字形」（5年生・令和7年7月実施）

目標：点画のつながりと字形の関係を理解し、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くことができる。

〈学習活動計画〉

時間	まとめり	学 習 活 動
1	探究	「こい」を指でなぞり、点画のつながりと字形の関係について話し合い、それらを意識した書き方を五・七・五調にまとめる。
2	習得	毛筆で「ふるさと」を書き、教材文字と比較したり、友達から意見を聞いたりして、自分の課題をもつ。
3		点画のつながりと、自分の課題を意識して、半紙に「ふるさと」を書く。
4	活用	毛筆の学習を生かして、硬筆で「ふるさと」「うぐいす」を書く。

探究

教材文字「こい」のなぞり書きや書字を通して点画のつながりを意識すると字形が整うことを理解させた。さらに、習得へつなぐことができるよう、めあてに沿った五・七・五調の合言葉を「穂先をね ながれるように 立てて書く」とした。また、ポイントとして、正しい書き順で書くことで字形が整うことを伝えるため、参考図書（※）より「書き順を 守るとしぜんに 字がきれい」という五・七・五を引用した。授業で扱った後、学級文庫として置いておくと、興味をもって読む児童がいた。

習得

児童に、自分がさらに取り組むとよい課題を探究し、設定させた。まず、数回練習して書いた自分の書字をタブレットで撮影し、画像比較ツールを使って教材見本と重ねたり、並べたりして比べ、自分の課題を見つけさせた。さらに、タブレットにアドバイスシートを用意し、自分の書字に対する友達からのアドバイスをもらう時間を設けた。児童はアドバイスシートに入力された内容を参考に、自分の課題を設定した【資料④】。

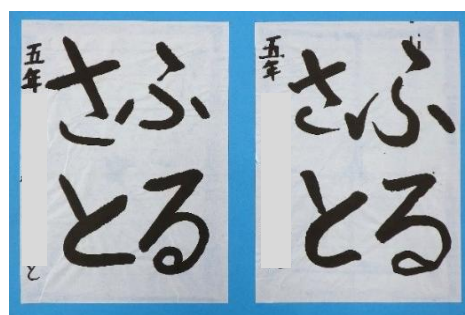
児童Aが書いた「ふ」の三画目に注目すると、単元の始めには、とめて書いているのに対し、まとめ書きではしっかりとねて書いている。これより、めあてを意識して取り組むことができていたことが分かる【資料⑤】。学級全体の変容を見ても、およそ9割の児童が「ふ」や「さ」の点画のつながりを意識して書くことができていた。

活用

毛筆で学習したことを、硬筆で練習させた。合言葉を意識して書字する姿が見られた一方、毛筆のようなはね・はらいの表現に難しさを感じる児童もいた。毛筆で学んだ点画のつながりや運筆のリズムは、硬筆の整った書字の基礎となっていることを意識さ

学習課題を見つけよう どうすれば、もっときれいでバランスよく書けますか？	
自分の意見	友達からの意見
・点画を意識する ・中心をそろえる ・止め、はねに気を付ける ・流れるように書く	・字をきれいに書く ・文字の大きさに気を付けて書くといいね ・もっとでかくするといい

【資料④ アドバイスシート】



【資料⑤ 左：最初 右：最後】

せ、日常の硬筆指導に関連付けることが重要であると、改めて見直すよい機会となった。

② 「点画のつながりと読みやすさ」（6年生・令和8年6月実施）

目標：点画のつながりと読みやすさの関係を理解し、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くことができる。

〈学習活動計画〉

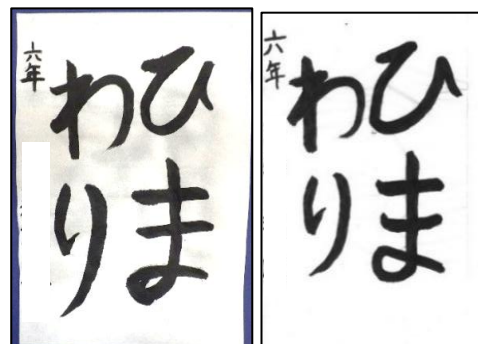
時間	まとめり	学 習 活 動
1	探究 〈考えよう〉	5年時の既習事項を想起し「ひまわり」を毛筆で書き、点画のつながりと文字の読みやすさの関係について話し合い、それらを意識した書き方を五・七・五調にまとめる。
2		毛筆で「ひまわり」を書き、教材文字と比較したり、友達から意見を聞いたりして、自分の課題をもつ。
3	習得 〈たしかめよう〉	文字と文字とのつながりと、自分の課題を意識して、半紙に「ひまわり」を書く。
4	活用 〈生かそう〉	毛筆の学習を生かして、硬筆で「ひまわり」「ゆずり葉」を書く。

探究

学習活動計画の習得・活用・探究を「たしかめよう・生かそう・考えよう」と言い換えて提示した。導入の際に「点画のつながりと字形」の既習事項を想起させるため、5年時に作成した五・七・五調を掲示した。すると多数の児童が正確に記憶していた。次に、教材文字の「ゆり」より、どのようなことを意識すると読みやすい文字の集まりになるのかを考えさせると「点画のつながりを、文字の終筆から次の文字の始筆につなげるとよい」という意見がでた。既習事項を意識しながら、文字と文字のつながりを意識して書くと、より読みやすい書字ができることを確認した。これらを踏まえ、合言葉を「読みやすく つなげて書こう 文字と文字」とした。最後に、単元の目標だけでなく、5年時に取り組んだことと同様にして、児童自ら課題を設定させた。

習得

児童Aの単元の始めの書字と、まとめ書きを比較すると、まとめ書きの「ま」の二画目の始筆が少し上を向いていることが分かる。一画目から二画目へ流れるように運筆されており、5年時に学習した点画をつなげて書く意識ができていることが分かる。また、「わ」と「り」の文字の配列を比較すると、まとめ書きでは真っすぐな配列で書けている【資料⑥】。このことから、5年時の既習事項を、6年生の学習につなげることができていると考えられる。また、めあての達成のため、アドバイスシートを見直したり、試行錯誤を繰り返したりしながら粘り強く書く姿があった。

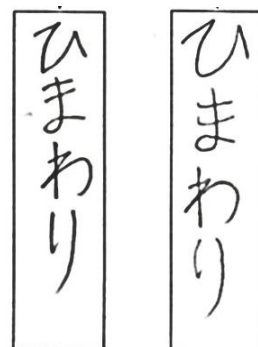


【資料⑥ 左：最初 右：最後】

活用

毛筆で学習したことを、硬筆で練習する活動を行った。児童Aの単元の始めの書字と、

毛筆を学習した後にまとめ書きした書字を比較すると、全体の文字の配列が整っており、単元目標を意識しながら書字ができていることが分かる。また、5年時の既習事項を想起させたことで、「ま」の二画目の点画のつながりの意識がされており、学習の系統性を理解し、より整った書字ができたのではないかと考える【資料⑦】。



【資料⑦ 左：最初 右：最後】

5 成果と課題

(1) 研究の成果

① 手立て①について

どの児童も、単元の目標や自分の課題の達成に向けて、合言葉を作ったり、友達と客観的に言葉でアドバイスし合ったりすることによって「言葉による見方・考え方」を働かせて理解することにつながった。これは、習得・活用・探究のバランスと順序を考えて単元構成を工夫し、授業を行ったことによる成果であると考え。児童は、教師が示した学習計画をもとに、見通しをもって授業に参加することができていた。

② 手立て②について

五・七・五調の合言葉を、参考図書を活用しながら自分たちで話し合って作る活動は、単元全体のねらいを明確にし、全員で共有するために有効であった。この五・七・五調の合言葉は、学年が上がっても覚えている児童が多く、単元の系統性を理解させながら、新たな単元へ発展させる手助けとなるものであると感じた。また、令和7年度の6年生に対するアンケートでは「書写の学習内容はよく分かりますか」という質問に対し、4月は「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と回答した児童は70%であったが、2月には100%となった。このことから、系統性を意識した指導（手立て②）や見通しをもたせる学習計画（手立て①）を継続することにより、児童の文字や文字の集まりの整った書き方についての理解がより確かなものになると考える。

(2) 今後の課題

- ・ 自己調整学習の観点から、単元の学習計画を教師が与えるだけでなく、児童自らが学習計画を立てて進められるような手立てや、それを分かりやすく共有・振り返りできる工夫を追求していく必要がある。
- ・ 児童が自分の課題を設定するために、教材文字と自分の書字を比較させたり、友達からアドバイスをもらったりさせたが、課題の設定が困難だったり、書字の変容が見られなかったりする児童もいた。課題設定の仕方や、意識づけの指導法を模索していく。

6 おわりに

本研究での学習計画の提示や、参考図書を活用した系統的指導の工夫は、児童が単元の見通しと自らの課題を明確に捉え、試行錯誤しながら粘り強く書字に取り組む力へとつながった。また、系統性を意識した指導法や言語化による知識の定着は、他教科の授業改善にも広く利用できるものであると考える。本研究の成果を今後の教育活動全体の礎としていきたい。

※参考図書

「めざせ書写の達人！五七五でおぼえよう」全3巻 樋口咲子監修 岩崎書店発行